

# 手賀沼が海だったころ

コロナ収束をにらんだ新たな試み



## 6/18 柏歴史トークとコンサートイベント開催

### 1. コロナ収束をにらんで

新型コロナ感染症拡大の影響で、一昨年、昨年といろいろな活動が制限され、大きなイベントもしにくい状況があったと思います。当会については、昨年度は歴史講座については参加者が以前より少ないながらも計10回開催できましたが、歴史講演会は開催しませんでした。一時期のように、会場自体が借りられない、ステイホームが奨励されて外出もままならない、といった状況は脱しましたが、まだ昨年はある程度の規模のイベントを会場を借りて開催することがはばかれる雰囲気がありました。2023年5月8日からは、新型コロナ感染症が5類に引き下げられることもあり、今年はコロナ禍以前にあったイベントが復活されたり、新しい動きが出ています。

当会もコロナ禍収束をにらんで、講演会などの活動を以前のように復活することとし、今回新たな試みと

して講演会をソフトにしたようなトークとコンサートと同時に行うようなイベントを開催しました。

### 2. 新たな形の歴史トーク & コンサート

上記イベントは去る6月18日にJR柏駅前の京北ホールで以下の通り行われました。



<京北ホールで行われた今回のイベントでの歴史トーク>

2023年6月18日  
(日) 14時30分～16時30分 (14:15開場)  
【会場】京北ホール(千葉県柏市柏1丁目4-3京北ビル6F)

【参加費】500円(資料代)

【出演】歴史トーク：小室裕一氏(千葉城郭保存活

用会代表・日本城郭史学会会員)

ギター弾き語り：coyomiさん(シンガーソングライター)

千葉城郭保存活用会と当会の共催、企画は月と魚座舎、後援は千葉県観光物産協会 柏市観光協会 観光考古学会 (株)塚原緑地研究所です。

また、最近ブームとなっている御城印が会場販売され、酒々井町情報発信館「まるごとすい」に当会誌『水辺の城』を置いて頂けることになりました。

### 3. 歴史トーク&コンサートの内容について

今回、歴史トークでは、柏の中世・戦国時代って、どんな武将がいて、どんな戦いがあったのでしょうか?という疑問に答えるべく、小室裕一氏とギター弾き語り：coyomiさんとの掛け合い形式でトークは進行了しました。



<coyomiさんのギター  
弾き語り>

歴史トークの内容は柏市を含む古代から中世にかけての相馬郡の歴史に始まり、戦国時代の柏市域の様子まで、幅広いものでした。

歴史トーク内容のサマリー及び補足資料として、当日配布された資料をもとにふり返ってみたいと思います。

(1)「千葉常胤と相馬郡  
(柏市)～柏市が日本の歴史を動かした?～」  
千葉常重(千葉常胤の父)が相馬御厨という荘園を伊勢神宮に寄進し、一旦その支配者となったものの、常重さらに家督を継いだ常胤の二代に渡って、荘園の支配圏をめぐる争いがあり、ようやく千葉氏がその支配を確立し常胤の子である相馬師常に継承されました。

この相馬郡は「香取の海」に面する交通の要衝で

ここをおさえることが重要でした。

「このような重要な相馬郡の領有に関しては、下総国司藤原氏の征伐、佐竹氏への頼朝による討伐、上総広常の頼朝による暗殺と相馬郡に関して、常胤の障害となっていたものが、鎌倉幕府成立の過程で、次々と消えていったわけであり、これを歴史の偶然と見るか否かは、興味深いものがあるのではないのでしょうか」と資料では言っています。

(2)「手賀沼は、二つの海を結ぶ重要な通路だった」

また手賀沼は中世までは香取の海という大きな内海の一部であり、水上交通、交易の場でした。

「香取の海を裏の海、江戸湾を表の海として、それぞれに流れ込む河川をまた交通路として、これと河川間等の丘越えによる移動を組み合わせて、単に南北だけではなく東西の横移動も可能にする水運等の交通路が出来ていました」としています。

(3)「相馬郡の戦国期。～  
柏の戦国期ってどんな状

況だったの?～」

そして戦国期には柏市域では、享徳の乱の時期に境根原合戦のように、様々な勢力の角逐があったことが紹介されました。

(4)「柏のお城の代表!  
「松ヶ崎城」って、どんなお城だったの?」

その戦国期には松ヶ崎城、増尾城、幸谷城といった城郭が築かれたといったことが語られました。

また coyomi さんのギター弾き語りのコンサートで、懐かしい歌も歌われました。最後にはジャンケン大会もありました。来場者は想定したより若干少なくはありましたが、東京都西部など遠方からお越しの方もあり、和やかな雰囲気のもとで盛り上がったと思います。それから県下を中心に諸団体から後援していただき、柏市議会議員の方からもメッセージをいただきました。

今後もこのようなイベントを継続開催し、できるだけ多くの人に柏市域を含めた東葛地方の歴史や文化財などについて、知っていたらと思います。

<当日配布の「歴史トーク内容のサマリー及び補足資料」より>

本日は「手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会」及び「千葉城郭保存活用会」主催、「月と魚座舎」企画による「柏市歴史トーク&海と城と暦のコンサート」においていただきまして、まことにありがとうございました。本日の歴史トークに関して、より理解のお役に立てればと考え、また備忘の為に御使用いただければとも思い、それぞれのテーマ内容の書面による解説のサマリーとさらなる補足を記載した本資料をご用意させていただきました。お役に立てていただければ幸いです。今後とも、「手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会」及び「千葉城郭保存活用会」並びに「月と魚座舎」へのご支援・ご協力の程、よろしくお願いいたします。

<テーマ1>「千葉常胤と相馬郡（柏市）～柏市が日本の歴史を動かした？～」

柏市は、中世期は相馬郡と呼ばれる地域であり、平安末期は、上総常晴が領有する地域でした。上総氏は桓武天皇を祖とする桓武平氏の代表的家柄であり、関東にて、未耕地の開墾などを積極的に行い、所領を増やしてきた一族でした。相馬郡もこの上総氏が中心となり開拓した地域でしたが、常晴は、この地域を実子の常澄には相続させず、同じく桓武平氏の流れを汲む千葉一族の千葉常重に譲ります。もっとも、当時はこういった開拓地は国司（国の長官）の意向次第で、理不尽に没収されかねない危険があったため、当時の開拓をした武士は、このような開拓地を京都の貴族また有力な神社仏閣に寄進し、自らはその管理官に就任して、権益の確保を図りました。千葉常重もこのパターンを踏襲し、1130年に相馬郡の一部を伊勢神宮に寄進し、相馬御厨という荘園にして自らは管理官に就任します。その千葉常重から1135年に家督を継いだのが、有名な千葉常胤で、常胤は常重と同様の立場になりました。

ところが、1136年には時の権力者平清盛と縁戚関係を持つ、下総の国司藤原親通から、常胤の父親の常重の下総国への未払い債務の代物弁済として、相馬郡の一部を差し出すように要求され、これに従うこととなります。またその後も上総常澄や常澄に当時寄宿していた源義朝らからも、相馬郡の権利取得を主張されました。しかし、千葉常重から相馬郡を引き継いだ千葉常胤は反撃し、1146年に相馬御厨の土地をあらためて伊勢神宮に寄進しました。隣国常陸の国の佐竹義宗からは、1161年に相馬御厨を過去の証文を根拠に占有される事態が生ずることにもなりました。こういった相馬郡を巡るさまざまな横やりが入る中で、房総半島に石橋山の戦いで敗戦した源頼朝が逃げてきます。常胤は頼朝を全面的に支援し鎌倉幕府の樹立に邁進するわけですが、その過程で、平家方であった下総国司の藤原氏を滅ぼします。そして佐竹氏については、頼朝に従わない関東武士として、頼朝が真っ先に討伐の対象とします。さらに上総氏については、棟梁であった上総広常が1183年に頼朝に暗殺されるという事態が発生します。

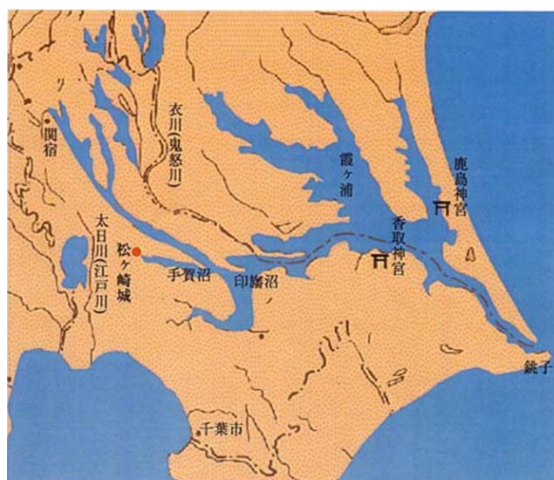
このような情勢の中で相馬郡に関しては、常胤次男の相馬師常に鎌倉幕府成立の論功行

賞として、正式にその土地が与えられ、ここにおいて常胤は宿願であった千葉一族による相馬郡の完全支配を成し遂げます。相馬郡は添付した600年前の関東の地図を見ていただくとよくわかると思いますが、関東地域の中心的な場所であり、また江戸湾と香取の海を結ぶ重要な要所でもあり（テーマ2部分をご覧ください）、ここを押さえることが地政学上極めて重要な土地であり、この相馬郡の領有により、のちの千葉氏の繁栄の基礎ができたものといえましょう。

しかしながら、このような重要な相馬郡の領有に関しては、下総国司藤原氏の征伐、佐竹氏への頼朝による討伐、上総広常の頼朝による暗殺と相馬郡に関して、常胤の障害となっていたものが、鎌倉幕府成立の過程で、次々と消えていったわけであり、これを歴史の偶然と見るか否かは、興味深いものがあるのではないのでしょうか。

### 〈テーマ2〉「手賀沼は、二つの海を結ぶ重要な通路だった」

お配りしている「600年前の関東地方の図」をご覧くださいとわかる通り、かつて手賀沼は手下水海（てがのみずうみ）と呼ばれ、関東地方の内陸に存在する巨大な海といってもよい湖沼「香取の海」の一部をなしていたわけです。当時の関東地方はこの香取の海を裏の海、江戸湾を表の海として、それぞれに流れ込む河川をまた交通路として、これと河川間等の丘越えによる移動を組み合わせ、単に南北だけではない東西の横移動も可能にする水運等の交通路が出来ていました。日本の中世期においては、陸の道路は舗装などされていないので、雨になると沼田のようになり通行できなくなりました。そこで陸上交通よりもより重量物の運べる交通手段でもある水上交通が一層重宝されていました。相馬郡は手賀沼を有し、西の先端部分付近の大堀川か大津川を遡行して源流部で丘越えをすれば、それぞれ江戸湾に通ずる太日川（江戸川）または谷地川（大柏川の別名、真間川に接続できる）に出て、そこを下ることにより江戸湾に出ることが出来ました。まさに裏の海と表の海を繋ぐ要所に相馬郡は位置し、そしてその機能を担う湖沼として水運の要として手賀沼が存在したものでした。



香取の海（推定図）

原典：手賀沼と松ヶ崎城の歴史  
を考える会編

『手賀沼が海だった頃』 た  
けしま出版（2000）

---

### <テーマ3>「相馬郡の戦国期。～柏の戦国期ってどんな状況だったの?～」

鎌倉幕府成立後、相馬郡は、千葉常胤の次男の相馬師常の領有となったわけですが、この相馬氏は、鎌倉時代末期以降、下総相馬氏、奥州相馬氏、とに別れ、その後、奥州相馬氏側が福島へと流れ、相馬の名族として残り知られているのが「福島の相馬」となります。そして、元々の領土である下総に残った方の下総相馬氏が、逆に衰退してしまうこととなります。なので、戦国時代になると、ここ柏市の領有関係は、まずそのあとに入ってきた小領主たちの分割統治となりました。そこで、各地にお城が築かれ、松ヶ崎城をはじめ、増尾には増尾城、幸谷城、そして布施には布施城が築かれました。布施城があった布施は守谷を本拠とした下総相馬氏の一族がまだいましたが、戸張にあった戸張城には、相馬氏系の戸張氏というのがいて、今日の主役といえる松ヶ崎城の周辺には、高田を中心として、匝瑳氏という一族がいたようですが、その後、この領域は、原氏や高城氏がおさめるようになりました。原氏は千葉氏の重臣として有名ですが、16世紀中頃に佐倉市の臼井城を本拠とする前は、今の千葉市南部を原氏主流の領地としていました。その後原氏は、1455年から1483年まで続いた享徳の乱で鎌倉公方が古河に移って古河公方となり、関東管領上杉氏と対立すると古河公方側に付き、原氏の当主原胤房は管領上杉氏についた千葉氏宗家を攻撃し、馬加康胤とともに、これを滅ぼしました。その後馬加康胤の側が、下総千葉氏の本家になります。その原胤房らは幕府・関東管領側に反撃されると、一時八幡庄に逃れました。また原氏は永正15年(1518)に上総武田氏に攻撃され本拠の生実城が奪われると、東葛地域に移ったようです。

享徳の乱のさなかではありますが、上杉氏側で長尾景春の乱という内乱があり、上杉氏と古河公方が和睦することになりました。それに反対した千葉孝胤(のりたね)を討伐しようと太田道灌らが今の柏市まで押し寄せ、文明10年12月10日(1479年1月2日)境根原で合戦となり、下総千葉氏は大敗しました。

松戸市の小金城は当初は原氏の城でしたが、その後小金周辺は原氏のさらに重臣の高城氏の領地へと変わっていきました。以前から、高城氏は松戸市の栗ヶ沢に関係があったようなのですが、原氏と一緒に東葛に本拠を移して、松戸市の根木内城に展開し、小金城を拡充してここに残ったようです。ある意味、原氏が高城氏に領地を譲ったとも言えるものです。そして戦国時代後期には、高城氏は、原氏とともに小田原北条氏の家臣という位置づけになって、今の松戸市、流山市、そして柏市の他、船橋市の北部にまで勢力を広げていきました。どちらにしても柏の地域は、相馬氏が衰えても、千葉氏の系統や、関係の深い原氏や高城氏が支配を続けていました。しかしながら、1590年に豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めた小田原の役においては、高城氏は、北条氏とともに小田原城に籠城したのですが、北条氏が滅ぶと同時に、高城氏も本拠である松戸の小金城を失い、柏の領地も失いました。その後、家康が江戸に入ると、柏市域の多くは、徳川幕府の領地になるとともに、柏市船戸などは今放送されている大河ドラマ「どうする家康」で松山ケンイチさんが演ずる本多正信の弟、本多正重の領地となり、以後、本多家の領地として明治まで続きます。

した。

#### <テーマ4> 「柏のお城の代表！「松ヶ崎城」って、どんなお城だったの？」

松ヶ崎城は、発掘の結果、戦国時代前期まで利用されていたお城であり、どうもそのあとの時代には使われていなかったということがわかってきています。お城の立地内容としては、下総のお城に良くある台地の先端部分を利用し、築造したお城であり、台地のすぐ下まで、かつては、手賀沼が迫っていたと思われます。地元の伝承では北東側の部分に船着場があったと言われており、伝承とあわせると、まさに手賀沼を握っていたお城だったといえます。お城の構造として、台地の先端部分を主郭として、台地北から西側にかけて空堀で区切っています。さらにその北に台地に堀切といわれる堀を二本入れた可能性があり、お城を台地から完全に切り離し、攻めにくくしています。また、崖の部分には腰郭と称される平坦部分の土地を作り、見張りを置いたり、眼下の敵を攻撃できるようにしています。また切岸といって崖を急にして敵方が崖をよじのぼれないように工夫しています。

発掘の際の調査で、主要な郭が2つ、そしてその周囲には腰郭が10もあるのが明らかになりました。また、台地東側には、古墳を再利用した物見台があります。発掘で、建物跡は見つかっておりませんが、東側に門跡が見つかったことにより、おそらく、東から北にかけてあった船着場から、斜面をあがって、その東の門を通り、城の中心部に入ってくる、といった形だったと思われます。北側の腰郭周辺や、北側の土塁と堀の間には、柵の跡も見つかっていますので、完成されたお城だということが定説になっています。また、出土遺物の中には、常滑焼の甕の破片、土鍋やすり鉢、かわらけの破片などの生活道具があり、番兵などが多少いたのではないかと思います。建物跡が検出されておらず、当時の地面の踏み固められた範囲も狭いことから、常時人が大勢いたのではなく、有事の際に兵を駐屯させるような場所だったかもしれません。このお城は、推測としては、戦国時代初期にどこかの軍事勢力が利用していたけれども、戦国後期になり、手賀沼の水がひいていったことにより、松ヶ崎城跡近くの船着場が使えなくなり、城としての利用が放棄されてしまったのではないかと思います。それに代わり、根戸城のように、もっと手賀沼に近い城の利用にシフトしていった可能性があると思われる。

柏市には松ヶ崎城のほかに、保存状態の良いものとして、幸谷城、増尾城といったお城があります。幸谷城は一見古いお城で、以前は室町時代の館ではないかといわれていました。しかし、本土寺過去帳、というものには、1485年、幸谷城のことと思われる「コウ城」という城で合戦があり、当地の豪族らしい佐久間兄弟と、どういう勢力が分かりませんが羽鳥氏、三谷氏が討死したという記録が残っています。この合戦は、どの勢力とどの勢力が何のために戦ったのかなどは分かっていません。この城跡の主郭部分は、東西約100m、南北約60mの方形の形をしております。周辺には少林寺、万福寺という古いお寺があり、まさに、増尾の集落の中心部にあった城と思われる。発掘調査の結果、歪みのある堀が出てきたことから、遺構としても、戦国期まで使われていたことが裏付けられ

ました。

次に増尾城ですが、こちらは増尾の中でも幸谷城よりは中心地ではなく、幸谷城の北700mほどの位置にあり、大津川流域のお城になります。今は増尾城址公園になっています。お城の規模としては、南西から北東の軸で130m、北西から南東にかけては45mから100mと小規模なのですが、しっかりとした土塁が存在し、土塁や堀は歪みがあります。また、城の出入り口を虎口といいます、その虎口の横に大きな櫓台状の突起物があります。これは、敵が侵入してきたら横から矢を射かけることができる工夫です。これは高城氏の城の造りの特徴のようで、戦国後期に高城氏の勢力がこの城の辺りを支配していたことを示す間接的な証拠にもなるものとなっています。



## 柏市域の地名と歴史（中編）

森 伸之

### 4. 江戸時代の柏村

では、江戸前期に成立したという柏村の様子は、どうだったのであろうか。

文政10年(1827)の柏村上組絵図をみると、柏村の北は手賀沼を臨み、南は柏神社のところで、野馬土手を境として上野牧と接し、水戸街道は柏村を南北に縦断している。柏村上組絵図では、人家は水戸街道沿いにあるが、まばらに建っている感じで、密集している様子ではない。人家の周囲、街道から少し

離れた場所には畑が広がっている。寺社は上図では柏神社があるのみであるが、実際には寺院では長全寺は既に柏に移転している。

周知のように、水戸街道は水戸と江戸を結び、その沿道の産品を江戸に輸送したり、逆に江戸から様々な物品が水戸街道によって運ばれ、周辺の住民の需要をみたしたりしていた。柏はその途上であって、勿論我孫子方面からの物資は小金、その先の松戸、新宿、千住へ輸送されたりした

が、手賀沼の漁業などの産品は手賀沼沿岸から柏を経て水戸街道で運ばれたものも多であろう。

柏を含めた水戸街道沿いの様子は、『駅路鞭影記』という水戸藩士が書いた紀行文のなかでもみることができる。『駅路鞭影記』は正徳5年(1715年)に書かれたもので、正保年間(1644~1647年)の水戸街道付替から70年ほど経った時点のものである。『駅路鞭影記』は写しが茨城県立図書館にあり、『駅路鞭影記』を抜粋

したと思われる『駅路鞭影記抜萃』も同館が所蔵している。

『駅路鞭影記抜萃』（峰雪山 昌隆草稿（茨城県立図書館蔵））によれば、正徳5年（1715）当時の柏周辺の水戸街道沿道の様子は、以下の通りである。

#### 向小金

あめを紙に付て売所なり  
もりとあめと名物の号を  
とれり

小金原へ入前に人里有

原と里のさかい

押廻しいくねにて海道に

はしほり木戸※有

是ハ野駒里の田畑へ入込

ぬため計 夜毎に此木戸

しめ切穢多共番をする

（略）

此野路に並松まハらす有

是やこの野辺渺々として

遠き故行旅道を失わんか

と

梅里君命して此松を植し

む大雪闇夜にも

これによりまよふ事なし

原を出はなれ茶屋有煎茶

いも串酒を売 （略）

※枝折木戸か



#### かしわ

民家軒をならへ表に榎を

植る 八月廿日市町立

宿の右に長禅寺とて禅宗

あり

#### よば塚 人家有

此所にて団子を売也 長

雨に八道悪ク成所也 其

節八向小金より根戸

迄廻り道有 しこ田通一

里程余計をまわる

よは塚を行過上り坂有道

悪舗時ハ

馬より下りてよし

#### 根戸 阿彦迄十八九丁有

民家の表に榎を植る 九

月廿二日

市町立左の方にとふよふ

（東陽）寺ト真言宗アリ

此向小家の脇に井有

浅き井にて冷水なり夏旅

人爰（ここ）に望む井の

根に大キ成銀杏の木有

右に妙蓮寺法華宗あり

左に布施弁天への道一里

程 此根戸より筑波通り

水戸海道也

（以下略）

向小金の記事にあるよう

に、水戸街道が上野牧の領

域に入る際と上野牧から出

る際には、木戸を歩いて

かねばならず、夜は通行を

遮断するために、木戸を閉めていた。野馬が牧から出て人里を荒らさないように、野馬土手が築かれたが、全面に野馬土手がめぐってはいは牧を通貫して人の通行ができないために、木戸が築かれ、昼間は木戸を歩いて人が通行し、夜は木戸を閉めて野馬の侵入を防いだ。木戸番をしていたのは書かれている「穢多」ではなく、番非人であろう。番非人は被差別部落の住民として当地に定住していたわけではなく、江戸かどこかから連れてこられた者と思われる。また向小金では鮎を売られ名物となっていたり、茶屋があって、煎茶やいも串、酒も売っていたというのは、物資の輸送にあたる人々の疲労を癒す休息の場所が街道沿いにあったということになる。

「此野路に並松まハらす有 是やこの野辺渺々として遠き故行旅道を失わんかと 梅里君命して此松を植しむ大雪闇夜にも これによりまよふ事なし」とあるように、水戸黄門として知られる徳川光圀が命じて水戸街道沿いに松並木がつけられ、それによって大雪や



闇夜であっても道に迷うことがなかったという。

向小金を出て、上野牧を突っ切って東に向かえば、木戸を越えて柏に入る。その柏の様子は『駅路鞭影記抜萃』に3行しか書かれていないが、「民家軒をならへ表に榎を植る」とあるように、ある程度民家が集まって集落を形成していたのが分かる。また表に榎を植えるとは今もあり、榎は生垣の役割をすることもあり、古くは一里塚の目標木にも使われていたようである。注目すべきは、「八月廿日市町立」と八月二十日に市が立つということである。定期市が開催されるのは、周辺に集落があり、人が集まってくることを意味する。

柏が「河岸場」を意味するならば、それは勿論手賀沼沿岸の「河岸場」と関連がある。そもそも柏の集落は、元は手賀沼縁の台地上にあったらしい。それが正保年間（1644年～1648年）の水戸街道の引き直しの後、水戸街道沿いに移動したという（角川日本地名大辞典）。江戸期に存在した河岸のうち、現在の柏市柏を通過して、水

揚げした荷を陸送したのは戸張河岸と呼塚河岸であるが、呼塚河岸は江戸末期から栄えた河岸で、柏村の成立に関係していたのは戸張河岸であると思われる。

柏は江戸初期から末期に衰退するまで存続していた戸張河岸に関係した地名であろうか。

柏の東に位置する呼塚は、江戸時代から雨が降ると水が出て悪路になっていたようで、その場合は向小金から篠籠田経由で根戸までまわり道をしたようである。その際には、柏は通らずに、大堀川の北側の道を進んだのであろう。なお呼塚とは、現在の呼塚交差点の辺りではなく、旧水戸街道を柏市街から東に進んだ大堀川河口に近い場所になる。団子を売っていたとあるので、茶店のようなものもあったかもしれない。そこからさらに東に行くと根戸となり、ここでも民家の表には榎が植えられて九月二十二日には市が立って集落が形成され、東陽寺近くに旅人の喉を潤す井戸があるなど、通行する人の一息つける場所であったろう。妙蓮寺付近で布施弁天へ行く道と水戸街道は分

岐していくが、人や物が往来する街道として、付近は整備されていたと思われる。

柏村の話に戻れば、柏村の村高は元禄郷帳で約301石、天保郷帳で約455石と増え、天保14年（1831）には家数81、明治5年（1872）家数100、住民数584人と居住者も増加していく。また田畑で得られる収入以外に、柏村や周辺の農民は、河岸で揚がった荷物を運んで駄賃収入を得たりして比較的裕福であったかもしれない。その源泉は戸張河岸の荷揚げに伴う陸上輸送であった。



その戸張河岸は手賀沼に注ぐ大津川左岸にあって、江戸初期から栄えていた。その昔利根川の船便では関宿をまわって江戸まで荷を運んだが、野田の三ツ堀辺りの浅瀬を湯水では通ることができず、また時間がかかるため、利根川から手賀

沼に入り戸張で荷を揚げて馬に積み替えて陸送していたのである。

寛文10年(1670)に布佐から木下まで土堤完成した(同時期、海野屋作兵衛ら手賀沼干拓)。その土堤が出来て利根川から船が手賀沼に入れなくなったため、戸張河岸では土堤完成前は銚子方面の荷を扱ったが、土堤完成後は、手賀沼周辺の荷中心となったという。

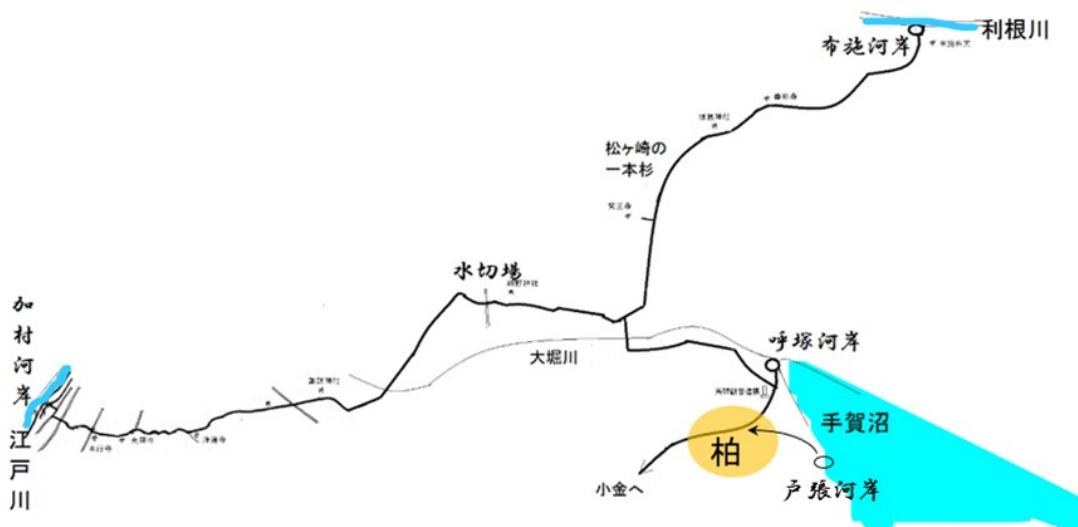
寛文10年(1670)以前は冥加金を払い、問屋営業を行った(柏市・浜嶋家資料)のだが、宝暦3年(1753)の資料では、馬持ちが3軒の問屋と契約し

荷を松戸河岸(16.5Km先)、流山河岸(10Km先)に運搬、安永2年

(1773)の資料(柏市・浜嶋家資料)では3軒の河岸問屋では荷が少ないので一ヶ月を三分し日数を割って営業したという。こうした駄賃収入は、当地の馬持ち農家の貴重な副収入であった。

戸張河岸の荷の内容は米、大豆、小麦、酒(手賀)などで、流山河岸、加村河岸に運搬されたが、戸張河岸からの荷物は、馬の背に載せられるなどして、柏市戸張の正光寺前の坂(駄賃坂)を上って運ばれた。急な駄賃坂を上って

荷物を運んだことは、荷揚げの知らせを聞いた地元の農民が、雑煮を食べかけのまま家を出て、駄賃稼ぎのために夢中で荷物の運搬にあたったという(「食べかけ雑煮」という民話)。しかし手賀沼干拓が進むと、船の運航に支障をきたし、戸張河岸は衰退していく。戸張河岸が衰退するとかわって呼塚河岸が栄えるようになり、柏はいずれにしても人と物資が往来する場所であった。そのような水戸街道沿いの村として、柏村は中規模クラス以上の立派な村落として成長していた。



<周辺の河岸と柏>

## 5. 明治期以降中核都市へと成長した柏

水戸街道の小金宿、我孫子宿の間に柏は位置し、宿場ではなかったが、前述のとおり柏は戸張河岸、後に呼塚河岸からの物資輸送

を担う村として、次第に発展していった。東の呼塚は低地にあり、大雨などあるとすぐ浸水し、水戸街道の難所であったが、柏の中心部は台地上の比較的高い場所になる。柏神社辺り

は標高22m以上あるが、千葉や船橋といった水辺の微高地に中心部があった都市と比べて非常に高い場所にある。

都市名	地点	標高
千葉	千葉市中央区市場町 千葉地裁、千葉県庁付近	3.5m
船橋	船橋市本町4丁目 船橋東照宮付近	3m
柏	柏市柏3丁目 柏神社付近	22.8m
松戸	松戸市根本 松戸市役所付近	11.3m

### <千葉県北西部各都市の主要部分の標高>

千葉は千葉氏が治めた千葉庄に端を発し、都川が中心部に流れ、千葉神社など古い寺社を配しつつ、県庁所在地にふさわしい規模の市街地を発展させたが、中世に千葉館があったという千葉地裁付近や隣接する県庁がその中心とすれば、東の亥鼻山を後背とした都川沿いの微高地が中心ということになる。船橋は江戸初期に建てられた徳川家康の

船橋御殿跡（御殿地）、船橋東照宮が中心と考え、これも海老川が中心部を南北に流れ、その河口に近い船橋御殿跡付近はやはり水辺の微高地である。地勢的には、千葉や船橋の古くからある市街地が川沿いの微高地であるのに対し、柏の中心地は台地上の比較的高い場所にあり対照的である。柏については、水戸街道沿いの西には上野牧と

隣接し、東に手賀沼を臨む台地上の集落から発展したもので、台地上でも生活が可能になった江戸期に成立し、地形からみても千葉や船橋とは成り立ちが大きく異なるのが分かる。

では、明治期以降、すなわち近代の柏は、どのように発展していったのか。以下簡単に振り返ってみよう。

明治6年（1873）千葉県東葛飾郡柏村となる

明治22年（1889）戸張村、篠籠田村、松ヶ崎村、高田村等合併し、千代田村となる

明治29年（1896）常磐線の開通とともに柏駅開設

大正15年（1926）千代田村が町制施行、柏町と改称

昭和13年（1938）柏陸軍飛行場開設（軍都柏→柏の街中はほぼ関係なし）

昭和29年(1954) 柏町、田中村、土村、小金町が合併し東葛市が誕生  
直後に小金町の大部分は松戸市に編入、富勢村の一部を加え、柏市へ  
昭和30年(1955) 柏の大火で市街地の多くが焼失  
昭和32年(1957) 防火建築帯と呼ばれる鉄筋コンクリート造りの駅前商店街復興  
昭和45年(1970) 柏駅東口再開発 「商業都市柏」へ  
昭和48年(1973) 柏二番街商店会がアーケード型の商店街開設

松戸や我孫子とは違い、水戸街道の宿場ではなかった柏に明治29年(1896)常磐線の駅が開設されたのは、地元の誘致運動が奏功したためであるが、柏駅開設によって柏は大きく発展した。水戸街道沿いの街並みに加えて、駅前に商店が建ち始め、やがて駅の北側にも千葉県立東葛飾中学校(現在の県立東葛飾高等学校)が設立されるなどした。

大正15年(1926)には柏町が誕生、戦後になるとさらに周辺の町村を加えて市町村合併が強力に推進

され、昭和29年(1954)には東葛市が誕生した。しかし旧小金町の合併反対運動を受けて市議会が旧小金町の一部を除く地区の松戸市編入を可決、また合併に際して保留していた富勢村議会が、東葛市及び我孫子町への分村合併を議決し、旧小金町の大部分を除き、富勢村の一部を加えた新たな市として、東葛市から改称した柏市が誕生した。

なお現代に話を進める前に、明治はじめの開墾地名である柏市域の豊四季、十余二という地名について、

見ていかねばならない。豊四季は、初富(鎌ヶ谷市)、二和(船橋市)、三咲(船橋市)に続く、旧幕時代の牧を開墾して生まれた四番目の地名である。さらに五香(松戸市)、六実(松戸市)、七栄(ななえ:富里市)、八街(八街市)、九美上(くみあげ:香取市)、十倉(富里市)、十余一(白井市)で十二番目の十余二となり、最後の地名は十余三(とよみ:成田市)である。この豊四季、十余二の開墾は苦難の連続であった。  
(続く)

### お知らせ

<『水辺の城』第7号発刊について> この7月に発刊しましたが、まだ残部があります。  
<11月26日 松ヶ崎城と周辺の歴史散歩開催> (雨天・荒天の場合は中止いたします)  
日時: 2023年11月26日(日) 10時半集合、13時頃まで  
集合場所: JR北柏駅 改札口  
行程: JR北柏駅→旧水戸街道(花戸原遺跡)→松ヶ崎城跡→(諏訪道)一本杉→  
覚王寺参道石仏群→松ヶ崎香取神社→松ヶ崎バス停(解散) 約4.1km  
参加費用: 300円(資料代他)  
その他: 歩きやすい靴、服装でお越しく下さい 帽子着用、水筒・ペットボトルなど持参  
をお願いします

### 手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第49号 2023.11.23  
編集・発行人: 森 伸之  
年会費 2千円 振込先: 千葉銀行 柏支店 普通 口座番号 346147